

残念の極みです。今年7月9日、名古屋で「西田利貞先生を偲ぶ囲碁会」を開き、長年のお付き合いに感謝し哀悼の意を表した次第です。

西田さんに、東大時代そしてそれ以降も親しくしていただいた先輩・同僚・後輩、そして囲碁仲間を代表し、改めて心から感謝しつつ筆をおきます。

西田利貞教授を偲ぶことば

ホセア・カコンボ
ダルエスサラーム大学

ダルエスサラーム大学の野生動物保護・動物学教室の生徒や関係スタッフは、西田教授のことをいつまでも忘れないでしょう。彼はマハレに行く途中によく研究室を訪ねてくれました。とても気さくに生徒やスタッフたちと言葉を交わし、講義をしたりセミナーを開いたりしてくれました。しかし、彼の貢献は、そうしたよき指導者としての役割だけに留まりません。

西田教授は、穏やかで温かく、深い洞察力と非常に正確な知識を備えた人でした。彼の生涯をかけたアフリカでのチンパンジー調査は、当然ながら人々への興味にその根を持っていました。彼は、とくにトングウェの現地人が研究に関わることを強く望んでいました。彼は現地でも大変好かれていて、彼がやってきたというニュースは国立公園の周辺に住む人々にあっという間に広まっていた。西田教授は、彼の不在中に代わりにマハレでデータを取り続けた現地スタッフに、時計やTシャツ、写真や教科書など多くのプレゼントを贈っていました。

マハレの民族出身であるタンビラ教授と私が西田教授と一緒にマハレに入った2001年夏のこと。ある日の午後、現地のフィールドワーカーと近隣村落の人々が私たちのためにンゴマ（現地のお祭り）を開いてくれました。彼らは西田教授の到着を祝って、食べて飲んで踊りました。自分たちと同じ民族であるタンビラ教授がンゴマに参加し、驚くべき軽快さで踊り、彼らの歌を合唱してくれたので、現地の人々も日本人研究者も大興奮でした。

西田教授は、チンパンジーとその生息地はもちろんのこと、公園の周囲に住む人々の貧困についてもとても心配していました。そこで西田教授と私は、現地の人々の苦境

を少しでも解消すべく、2000年カトゥンビ村に小学校を設立することになりました。その資金は、日本政府とマハレを想う人々の寄附によって賄われました。工事は32,757ドルをかけて村の人々らの手でおこない、2001年の1月に始まり、2002年の5月に完成しました。現在、中学校も造って「トシサダ・ニシダ中学校」という名にしようという提案がなされています。かつて彼は私にこう打ち明けてくれたことがあります。「カコンボさん、マハレにはやる人がたくさんあるのに、それをやる人の数は少ないし、時間もまったく足りないんですよ。」

タンザニアで仕事を続けて40年以上も経つと、タンザニアの現地紙がたまにマハレの保全や研究活動に関して正確ではない報道をすることもありました。しかし、良識や科学的誠実さを踏み越えることがない限り、西田教授がそれらを気にされることはありませんでした。

（翻訳：清野（布施）未恵子）

西田さんとトングウェ

掛谷 誠
京都大学名誉教授

2011年。未曾有の大震災・原発事故にみまわれた年に、私たちは西田さんを失ってしまった。西田さんは、自然破壊を憂え、類人猿の保護にも心血を注いでおられたが、それらの状況が悪化していく過程は、原発の数が増えていく過程でもあった。1971年に伊谷先生や西田さんとトングウェの村々を初めて訪ねたサファリを私は思いだし、丁度その頃が、時代の分岐点であったことに考えが至る。当時、伊谷さんは45歳、西田さんは30歳、私は26歳だった。その40年後、変質しながら積み重ねられてきた日本の現代文明化への営為が根底で破綻しはじめたときに、西田さんは逝ってしまわれたのである。

1971年に私たちは2回のサファリをともにした。1度目は、マハレの主峰のひとつであるシサガ山に登頂し、トングウェの地の南西部に位置するニエンダ・プラトの村々を調査する旅だった。2度目は、ンクングウェ湾の奥からルエゲーレ川沿いに東に入ったミバンガ村に向かった。私はミバンガ村に残って周辺の村々の調査を続けた。伊谷・西田のお二人は、さらに東部奥地のイブンバ山を目指し、大型獣の狩猟に依存するブスングウェ村を訪ねられた。ブスングウェ村の生活は、原野の奥のトングウェの本来の生き方を彷彿とさせたと、伊谷・西田のお二人は興奮した口調で語っておられた。（後に私もブスングウェ村を訪問し、その生活を再確認した。）いずれも、変化に富み、充実したサファリだった。

1度目は、伊谷さんの方針にしたがったサファリだった。伊谷さんは、食料も切り詰めて可能なかぎり荷物を少なくし、軽快な足取りで原野をすすむサファリを好まれた。2度目は、西田さんが主として食料計画を担当された。日数も人数も多いサファリだったことも関わっていたのだろうが、西田流は2羽のニワトリを含めた十分な食材を持参するサファリだった。伊谷さんは自らの「最少主義」と対比して、西田流を「豪華主義」と揶揄されていたが、考えてみれば、西田流は奥地の村々にできるだけ食料の

